

# 「多様な症状」を生じた患者に対する診療 — 本日の事例概要 —

資料 1 - 2

「多様な症状」が生じてJR東京総合病院小児科を受診した方のうち  
6名について、主治医から症状、経過、診療方針、転帰等について報告。

## 【6名の方の概要】

1. 発症時8歳女性:手術と帯状疱疹が先行し、両側大腿の紅斑と疼痛が出現、しばしば登校不可能となる。可能な運動を勧奨、7~8年かけて段階的に改善。
2. 発症時12歳女性:転落事故、膝挫傷が先行し、ほてりと全身の関節痛が出現、POTS合併、しばしば登校不可となる。可能な運動を勧奨、7カ月後には自制範囲内。
3. 発症時9歳女性:インフルエンザワクチン1週間後に下肢痛が出現、2回目で悪化し、全身痛、アロディニア出現し、一時登校困難に。鎮痛剤が一時有効で、自発的運動を制限せず観察が可能となり、1年後には自制内。
4. 発症時17歳女性:ピル(生理不順の治療)の服用後に手足のしびれ感と下腿の蒼白が出現、血栓症は否定されたが、下肢のミオクローヌスや全身の痛みが持続。ピルが原因との認識を否定せず、可能な運動を推奨。徐々に改善し、約1年半でほぼ症状消失。
5. 発症時7歳男児:日本脳炎ワクチン2回接種1ヶ月後、風邪症状が先行して、下肢痛による歩行障害が出現。神経内科的な精査と並行して、自発的運動を主体に運動を勧奨し、徐々に登校可能に。約1年半後にほぼ生活は正常化。
6. 発症時6歳女児:下肢痛と重症口内炎を契機に全身の痛みと下肢の出血斑が出現し、原因不明のまま症状が遷延。2年半後から当院で診療;慢性疼痛として対症的に診療し、徐々に発作的痛みが減少し、生活が改善。10年を経過し、ほぼ普通の生活が可能に。

診療方針:①除外診断、②様々な原因で疼痛を主体とする多様な症状が起き得ることの説明、  
③対症療法とともに運動を積極的に推奨、④学校や希望進路への積極的支援